

わら敷き乾燥防止を

ショウガは熱帯アジアが原産地とされ、日本へは2～3世紀ごろに中国より伝わり奈良時代には栽培が始まりました。

ショウガの香り成分には食欲増進の働きを促し、疲労回復、夏パテ解消に役立ち、健胃・解毒・消炎作用があり、辛み成分には強い殺菌作用、血行促進による発汗作用を高める働きがあることから、野菜としての食材だけではなく、生薬としても利用されています。

ショウガは三つのグループに分けられ、一般的によく見られるのが大ショウガです。大きさが1キロにもなる地下の塊茎部分を食べるもので、国産の94%がこの大ショウガです。

次に、塊茎が小指程度の大きさまでに成長した段階で葉が付いたまま収穫する500グラ前後のものを中ショウガ、また、軟化（光を当てない）栽培し15センチ程度に成長したところで太陽に当てて茎元が紅色になったところを収穫し、「はじかみ」として焼魚の添え物として利用される300グラ前後のものを小ショウガといいます。

今回は、大ショウガについて紹介します。

生育適温は25～30度です。15度以下では生育が停止し、塊茎は10度以下で腐敗します。

耕土が深く、肥沃で排水の良いほ場が適しています。連作すると病気が発生しやすいので最低2年は休耕し、キャベツ、ネギなどの作物と輪作しましょう。植え付けは晩霜のおそれなくなる4月以降に行います。早植えすると低地温で種ショウガが腐敗する危険性があります。本ぼ1平方メートル当たり堆肥2キロ、苦土石灰100グラ、緩効性の化学肥料や有機化成肥料100グラ（チッ素、リン酸、カリが15%の場合）を目安として施します。

栽植密度はうね幅70センチ、株間30センチとします。みずみずしく色つやがよく、良い芽がある種ショウガを100グラ程度に分割し、浅い溝を切り、芽の出る方を上にして、うね方向に平行に置き、5センチ程度覆土してうねを作ります。

生育途中、追肥と土寄せを2回程度行います（化学肥料30グラ/回）。1回目は草丈が25センチに伸びた頃、2回目は1回目の約30日後に行い、2～3センチ土寄せをします。その後へ夏季の乾燥防止と塊茎の緑化防止として地表面が見えない程度にわらを厚く敷きます。

夏季は1週間おきにかん水し塊茎の肥大を促しましょう。梅雨明けに草丈の3分の2程度の位置にネットを水平に張ると台風による被害軽減に役立ちます。塊茎は10度以下で腐敗するので、収穫は降霜前の10月下旬～11月中旬頃の晴天日に行いましょう。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部研究専門員）

